

地域感覚に関する基礎的研究 その1
- 地方の生活環境による地域感覚差について -
The Basic Research About The Area Sense No. 1
About The Area Sense Difference By The Living Environment In The District

四方紅美代**・尾崎晴男***

By Kumiyo SHIKATA **・Haruo OZAKI ***

1. はじめに

都市や農村など計画・設計を行う際に、「地域らしさを取り入れること」が必要とされる。しかし、「地域らしさ」とは不明確で概念的なものである。何を尺度に「地域」を見出し、その土地に合った計画・設計とすればよいのであろうか。

「風土」とは、自然環境、地形、社会、文化などあらゆるものを統合し、その土地に生きる人の“生活環境”である。この“生活環境”と言う小さな集落から村、町、市、都道府県へと発展し「地域らしさ」につながって行くと考える。山間地や海の近くに暮らしたなど地形によって織り成される“感性の違い”。これが、真の「地域らしさ」ではなかろうか。

感性は、生活環境に立脚した「無意識」の中に潜む「地域らしさ」である。地域性は、風土によって育まれた感性、価値判断基準など、あらゆる面を含む「地域感覚」となる。本研究では、「地域らしさ」に着目し、この感性の違いを「地域感覚」として定義する。現在の設計・計画では「地域」を歴史から見出す手法が多い。この手法に、生活環境によって育まれてきた「地域感覚」による違いを組み込む。これが、地域に根付いた「その土地に合った」設計技術・手法になると考える。

本研究では、一つの案として、土木構造物である橋梁の「かたち」を用いて関東および東北地方の生活環境による感性の差を明確にする実験を行った。その結果について述べる。

2. 地域感覚抽出手法

(1) 感性を測る手法

地域的な「無意識」によって受け継がれてきた

*キーワード：地域計画，イメ - ジ分析，意識調査分析

**学生員，工修，東洋大学大学院工学研究科

(埼玉県川越市鯨井 2 1 0 0 番地，TEL:0492-39-1393，

E-mail:dd0100024@toyonet.toyo.ac.jp)

***正員，工博，東洋大学工学部建設環境学科 助教授

(埼玉県川越市鯨井 2 1 0 0 番地，TEL:0492-39-1393，

E-mail:ozaki@eng.toyo.ac.jp)

「地域感覚」は、生活環境の中に溶け込んだ感性に宿る。この感覚を抽出し、目に見える数値として割り出す手法が必要である。

感性を扱った工学的な実験にあたるものに、環境心理調査・分析方法がある。調査方法には、その手法により「観察する」、「尋ねる」、「意識をとらえる」などに分類される¹⁾。

本研究は、生活環境によって育まれた地域感覚を抽出することが狙いである。そのため、「意識をとらえる」の中の SD 法を取り入れ、アンケート結果には、主成分分析を行う。

(2) 言語尺度

ひとつの言葉は、いくつかの表現で言い換えられる。例えば、「美しい」であれば「綺麗な」、「見た目の良い」などである。また、表現された言葉によって対象物への判断に影響が生じる。したがって、言葉は、一般的に使われ、非常に分かり易い表現でなければならない。

本研究では、県や市などの役所が作成し、一般向けに配布されている色彩や景観ガイドライン、色彩、橋梁、景観などの専門書、景観や心的な評価を扱った既存研究から、「明るい」や「繊細な」など感性を表現した言葉を拾い上げ、分類する作業を行う。また、その中からさらに分かり易い表現を選択し言語尺度とする(表 - 1)。分類作業は、「均整の取れた」などデザイン的表現、「柔らかい」などの視覚心象的表現、「現代的な」などの時代感覚的表現に大分類し、さらに細分類化する。

表 - 1. 言語尺度の一例

好きな	嫌いな
安定している	不安定な
頑丈な感じ	華奢な
親しみやすい	親しみにくい
優しい感じ	きつい感じ
のびのびとした	圧迫感
見慣れた	見慣れない
綺麗な	汚い
無駄の無い	ごてごてした
めりはりのある	めりはりの無い
近代的な	古典的な
軽快な	重々しい

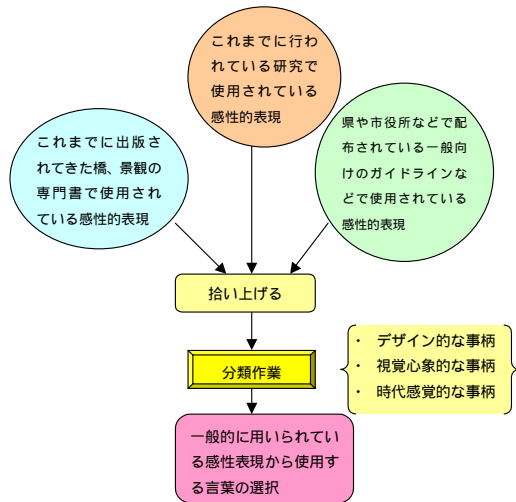


図 - 1 . 言語尺度作成のための分類作業

(3) かたち

「かたち」に対する地域感覚を知るには、誰が見ても分かり易いものが必要である。人の視野に入りやすい土木構造物の「かたち」とは、何であろうか。

一般的と考えられるのは、橋梁の上部工である。本研究では、一つの案として、土木構造物である橋梁（上部工）の「かたち」を用いる。この際、無意識の中に感性を引き出すことを目的としているため、余計な背景情報などを省く（図 - 2）。

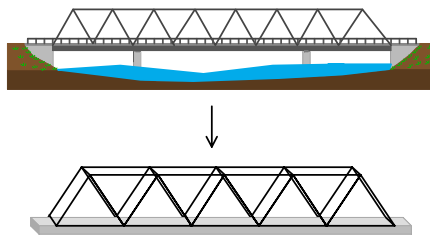


図 - 2 . 背景情報を抜かした橋の形の一例

(4) 生活環境の分類

自然が生み出す地形は、盆地、山、川、海など様々な形から成り立つ。これらに、門前町や城下町などが形成され、現代の生活へとつながる。本研究で考える「生活環境」とは、人格が形成されると考えられる10代後半まで暮らした、あるいは暮らしている環境である。この環境は、地形要素などが大きいと考えられ、大まかに生活環境を分類する。

3. 実験結果

(1) 実験方法

実験手法は、SD 法を組み込んだアンケート手法とし、本稿の2でまとめた地域感覚抽出方法とおりである。

「人間は誰も18歳くらいまでに肉体的なピークに達する」とされる。その時期までに過ごした地域特性が

感色などに定着すると言われる²⁾。よって、本実験では、純粋な判断を期待し、年齢対象を生活年数の浅い20歳前後を採用する。

生活環境は、「育ってきた期間が一番長い環境」と回答条件を設定し、「山や川の近く」などの選択肢を用紙に予め記載した中から選ぶものとした。また、評価項目は、言語尺度の選別によって得られた言葉を用いる。「好き」に対し「嫌い」など一対にし、「好き」は5点、「やや好き」は4点、「どちらでもない」は3点、「やや嫌い」は2点、「嫌い」は1点の5段階評価で記載し該当箇所に丸を付ける（表 - 2）。

表 - 2 . 使用した言葉

力学的 感覚	安定した感じ	不安定な感じ
	頑丈な感じ	華奢な感じ
生活体 験	親しみやすい	親しみにくい
	見慣れた	見慣れない
視覚心 象	好きなかたち	嫌いなかたち
	優しい感じがする	きつい感じ
	のびのびした感じ	圧迫感
	綺麗な感じ	汚い感じ

被験者へ提示する図は、トラス系、斜長橋系、桁橋系2種、ア・チ系2種の計6種である（表 - 3）。「山の風景には、この形の橋が好ましい」など全体評価されることを避けるため背景は一切含まないものとした。

この実験の回答結果から、生活環境を分類し、「地域感覚」を割り出す。集計作業は、関東など地方に分類後さらに、各地方ごとの生活環境に細分類する。

表 - 3 . 提示した図の一覧

ア・チ 系1		ア・チ 系2	
斜長系		トラス	
桁系1		桁系2	

(2) 回答者構成

関東および東北地方の生活環境による地域感覚を見る実験のため、回答者は、関東、東北に位置する大学に協力して頂いた。関東では、東洋大学の2年生、3年生の計91人である。東北では、八戸工業大学の2年生の計65人で合計156人である。年齢は19歳から24歳までの平均年齢は20.45歳であった（図 - 3）。

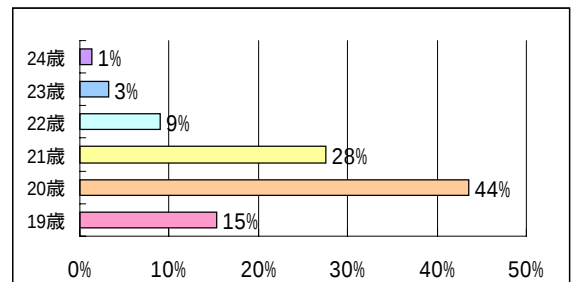


図 - 3 . 回答者の年齢構成

地方別に見る回答者の構成を下図に示す（図 - 4）。関東地方で育った人は、全体で 65 人、地方別では 45% であった。また、東北地方は、全体で 51 人、地方別では 37%である。

本研究では、関東および東北地方を「街中で都会的な環境で暮らした」、「平地で田畑が広がる郊外で暮らしていた」、「山や川の近くに暮らしていた」の3つの生活環境に分類した（図 - 5）。

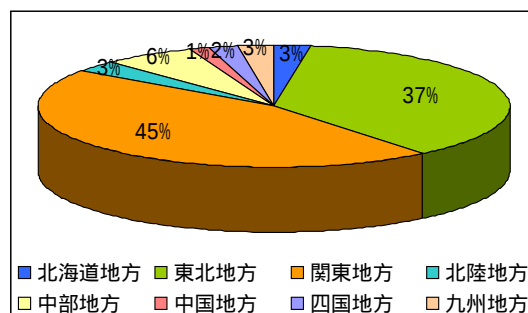


図 - 4 . 地方別による回答者の構成

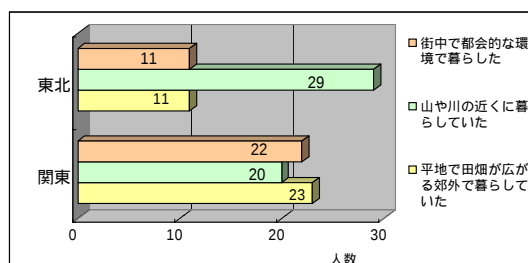


図 - 5 . 東北・関東地方の生活環境による分類

(3) 分析結果

分析手法は、主成分分析を使用している。分析は、6種類の「かたち」からとし、各地方ごとに3つに分けた生活環境別で行った。関東および東北地方の分析結果は、主成分が、第2主成分までで累積寄与率が80%を超える（表 - 4）。一般に、主成分を採用する場合、累積寄与率が80%程度の値が基準にされている。ここでは、第2主成分までを対象にすることとした。

表 - 4 . 各地方の生活環境別の累積寄与率

地方	生活環境	寄与率	累積寄与率
		主成分No1	主成分No2
関東地方	街中で都会的	71.79%	94.17%
	山や川の近く	81.12%	95.47%
	平地で郊外	48.67%	87.52%
東北地方	街中で都会的	59.12%	92.82%
	山や川の近く	59.56%	92.81%
	平地で郊外	53.12%	84.20%

(4) 実験結果

関東および東北地方の郊外、都会的な環境、山や川など自然が豊かな環境など、それぞれに異なる環境下で育まれた感性が、どのような差になるのかを中心に実験結果をまとめて見る。

《関東地方》

この地方では、3つの生活環境に共通して「かたち」への評価視点は、視覚心象が強く出る（表 - 5）。第1主成分を、視覚心象的な評価とし、第2主成分は力学的感覚の評価として考える。平地で暮らした人の評価視点では、視覚心象が強いが、街中で暮らした人は、視覚心象に「見慣れた」などの生活体験をとおした評価も加える傾向にある（図 - 6, 7）。

表 - 5 . 生活環境別による「かたち」への評価視点

生活環境	第1主成分の視点	第2主成分の視点
平地で暮らした	視覚心象	力学的感覚
山や川の近く	視覚心象	力学的感覚
街中で都会的	視覚心象	力学的感覚

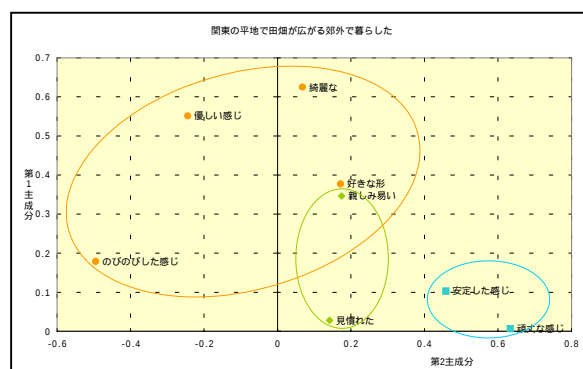


図 - 6 . 平地で暮らした人の評価視点

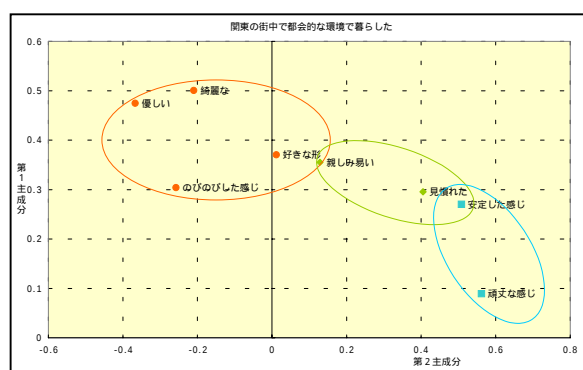


図 - 7 . 街中で暮らした人の評価視点

橋の「かたち」への評価結果を、主成分得点順位でまとめると表 - 6 のようになる。関東地方の生活環境別では、提示された「かたち」の中で評価が高いのは、円要素が強いア - チ形状である。三角形要素のトラス形状には、力学的感覚による評価は高いが、視覚心象的な評価は低い。桁の形状には、視覚心象による評価が低い、デザイン的な要素によっては力学的感覚が強い場合がある（図 - 8）。

表 - 6 . 生活環境別による「かたち」の順位

形状種別	街中で暮らした		平地で暮らした		山や川の近くで暮らした	
	第1主成分得点	第2主成分得点	第1主成分得点	第2主成分得点	第1主成分得点	第2主成分得点
ア - 系1	1	4	1	4	1	2
ア - 系2	2	3	3	2	2	5
斜長系	3	5	2	3	5	4
桁系1	5	2	6	5	4	3
桁系2	6	6	4	6	3	6
トラス系	4	1	5	1	6	1

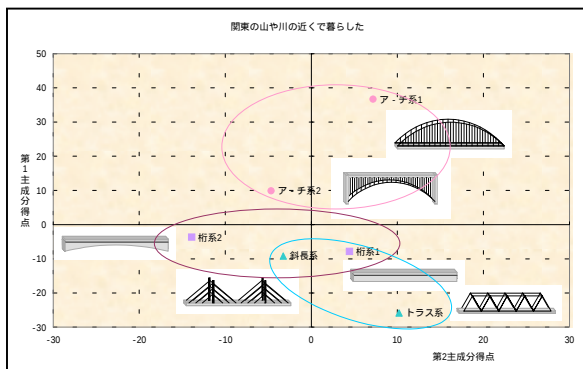


図 - 8 . 関東地方の街中で暮らした人の形状評価
《東北地方》

東北地方では、「かたち」への評価視点に生活環境によって差が認められた（表 - 7）。街中で暮らした人の評価視点は、山や川の近く、平地で暮らした人とは異なる。はじめに、力学的感覚、その次に視覚心象で評価する傾向にあった（図 - 9）。

表 - 7 . 生活環境別による「かたち」への評価視点

生活環境	第1主成分の視点	第2主成分の視点
平地で暮らした	生活体験, 視覚心象	生活体験, 力学的感覚
山や川の近く	視覚心象	力学的感覚
街中で都会的	力学的感覚	視覚心象

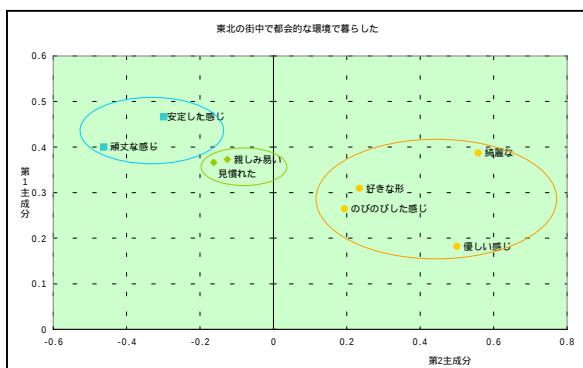


図 - 9 . 街中で暮らした人の評価視点

東北地方の生活環境別では、共通して視覚心象的な評価では、円要素が強いア - チ形状が高い。特に、山や川の近くで暮らした人は、ア - チ形状に対し力学的感覚も強い傾向にある（図 - 10）。三角形要素のトラス形状には、力学的感覚による評価は高い。主成分得点順位でまとめた橋の「かたち」への評価結果を表 - 8 に示す。

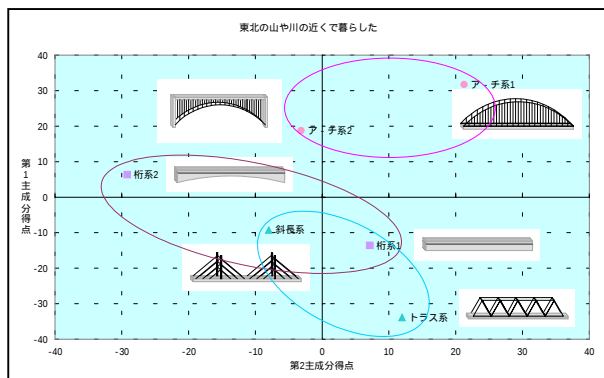


図 - 10 . 街中で暮らした人の形状評価

表 - 8 . 生活環境別による「かたち」の順位

形状種別	街中で暮らした		平地で暮らした		山や川の近くで暮らした	
	第1主成分得点	第2主成分得点	第1主成分得点	第2主成分得点	第1主成分得点	第2主成分得点
ア - チ系1	1	2	1	5	1	1
ア - チ系2	2	4	4	2	2	4
斜長系	4	3	2	4	4	5
桁系1	5	6	6	3	5	3
桁系2	6	1	5	6	3	6
トラス系	3	5	3	1	6	2

4 . まとめ

一般的に「かたち」は、四角形・円・三角形が「基本形」とされる。視覚心理によって人は、円に対し、暖かさや無限、四角形には単調、三角形は、緊張などを受ける³⁾。「基本形」の要素を十分に含むと考えられる橋の「かたち」は、視覚心象を受けやすいと思われる。結果をまとめると以下になる。

- 1) 生活環境別での視覚心象による評価は、同タイプの形状であってもデザイン的な要素が影響し差が生じやすい。
- 2) 視覚心象による評価は、地方、生活環境に差はなく、共通して曲線要素が強い傾向にある。
- 3) 「かたち」に対する評価視点は、生活環境によって差があると思われる。
- 4) 同一地方であっても生活環境が異なれば、「かたち」への評価視点は異なる。
- 5) 「見慣れた」など生活体験は、力学的感覚と視覚心象との常に中間にあり、2つの評価視点に組み込まれていると思われる。

色彩では気候による寒暖差とのバランスを保つ色調を無意識に選好するとされる⁴⁾。地域感覚差の要因の一つに自然現象や環境などが考えられる。また、これらによって影響を受ける生活環境から、地域独自の歴史・文化などが営まれ、ものの見方、考え方、評価に対する感覚差が生じていると思われる。

今後は、一地区に焦点を絞り、地域感覚を明確な数値として得ることが課題である。

参考文献

- 1) 日本建築学会：建築・都市計画のための調査・分析方法，井上書院，1987
- 2) 4) 佐藤邦夫：風土色と嗜好色 個性化時代の色彩計画，青娥書房，1981
- 3) D.A.ドン・イ、金子隆芳：形は語る 視覚言語の構造と分析，サイエンス社，1979
- 5) 和雄：橋の造形学，朝倉書店，2001
- 6) 社団法人日本橋梁建設協会：橋梁年鑑平成2年版，社団法人日本橋梁建設協会，1990
- 7) 竹林征三：風土工学序説，技法堂出版，1997
- 8) 長町三生：感性工学 感性をデザインに活かすテクノロジー - ，海文堂，1989